



衝撃レポート

平尾誠二

川島なお美

斉藤仁

みんな同じ病気であっ

という間に逝ってしまった

瘦せても、最期まで舞台に立ち続けることを選んだ

# 「運命のガン」で死ぬという事

論理的でスマートな指導力で、日本のラグビー界を引っ張ってきた



「ガンⅡ死」という時代ではなくなった。だが、どんなに優れた医師でも治せないガンがある。突然の余命宣告、残された時間はあまりに短い。平尾ら有名人も、その「運命」からは逃れられなかった。

## 会場に起きたざわめき

「アナウンズで平尾さんの名が呼ばれ、壇上の中央まで歩いて来られる姿を見て、会場からは息を呑むような静かなざわめきが起きました。これまでの姿とは明らかに別人で、私自身も愕然としたことを覚えてます。登壇して1時間以上にわたってお話をされていましたが、杖もつかず立ちっ放し。目を閉じて聞いていれば、とても重い病気を患っているとは思えないほど張りのある声でした。しかし、あまりに瘦せてしまった姿を目にすると、話に集中することはとても難しかった」

こう語るのは、今年4月に新聞社主催で行われた日本のラグビー界を盛り上げるという使命を全うしようとしていました。昨年1月、同じく50代前半の若さで亡くなった元柔道選手でソウル・オリンピック金メダリストの斉藤仁氏も最後まで病に立ち向かった。氏が強化委員長を務めた全日本

を制してきた男が、重い病に抗いながら、リーダーシップと強い組織について語る姿には鬼気迫るものがあった。講演が終わり、聴衆に頭を下げ、背筋を伸ばしてゆっくりと歩いて行かれる姿は今でも心に残っています」

言うまでもなく、平尾氏は30年以上にわたってラグビー界を引っ張ってきた存在だ。華麗なプレイヤースタイル、聡明かつリーダーシップあふれる指導力は誰にも真似できないものがあつた。19年に日本で開催されるラグビー・ワールドカップを控え、最も必要とされる人材が53歳という若さで逝ってしまった。別のラグビー関係者が語る。

「ガンが見つかったのが昨年の秋だったと聞いています。その段階で、相当地に進捗しており、手術は難しく、余命は長くないと言われたらしい。それでも本人は気丈に病と向き合いながら、最期ま

## 年間2万人が死ぬ

平尾氏と斉藤氏の命を奪った病名は同じだ。胆管がん。屈強な男たちも打ち勝つことのできなかつたこのガンに果敢に挑んだ女優が、川島なお美だ。15年に亡くなった川島の闘病生活を近くで見てきた関係者が語る。

「川島さんと最後にお会いしたのは、彼女が長野県で行う舞台公演へ出発

柔道連盟の関係者の話。「13年にガンが見つかったからも、闘病しながら選手への指導にあたっていた。亡くなる1ヵ月ほど前に強化副委員長だった増地(千代里)さんが電話をしたときも、『日本柔道の未来を頼むぞ』と熱く語っていたぞうです」

する直前でした。亡くなる2〜3週間前、すっかり痩せて筋肉も落ちていた。それでも彼女は弱音を吐いたり、つらそうな態度を見せることなく、笑顔で舞台への意気込みを語っていました。川島は13年の夏にガンが見つかり、その時点で余命1年を言い渡されて

いた。翌年1月に手術を受けたものの、抗がん剤治療は拒否して、最期まで舞台に立ち続けることを選んだ。

このように次から次へと有名人の命を奪っていた胆管がん。胆管は普段の生活であまり意識する部位ではないため、なんとなくマイナーなガンのように見なされがちだが、実は意外に死亡者数の多い病だ。がん研有明病院の肝胆膵外科部長、齋浦明夫氏が語る。

「胆管がんの患者は欧米に少なく、アジアに多い傾向があります。日本では、胆嚢・胆管がんで年間2万人弱の患者さんが亡くなっています。死亡者数でいうと、肺、大腸、

発見されたときには手遅れ、もうどうしようもない